

普通の付き合い

理事 永野 基綱

最近少し感じていることがある。もちろん、毎日のように留学生に接しておられる教員やWINコンコードの方々と違って、私の感想などは、取るに足りない、それどころか間違っただけなのかもしれない。

今年のNHK大河ドラマは新島八重のことらしいが、夫の新島襄は、日本最初の留学生である。といっても、行きは正式留学生であるどころか、密航者として渡米している。もちろん学費も持たずにだから実は無謀だが、それほど彼の異国に学ぼうとする情熱はすごかった。実に「若い熱意」の人であったといえよう。

若い熱意といえば、「Boys, be ambitious!」という言葉で有名なクラークは、新島襄の口ききで札幌農学校に来たのだが、その滞在は僅か8ヶ月に過ぎない。そんなクラークの言葉が、生徒たちの人生を変えるほどの影響を与えたのはなぜか。それもまた、生徒たちの側に、外国から学びたいという若い情熱が強かったからだろう。

外国から学びたいという若い情熱、それこそ、本来「留学」を支えるものである。もちろん今も、留学生たちは、それぞれが夢をもち、若い情熱をもって、日々勉強している。その姿には、昔も今も変わりはない。

ただ最近、「日本から学びたい!」という「若い情熱」が、何となくあまり感じられない留学生も見かけるようになったと思うのは、私一人の感想だろうか。ただし私は、決してそれを非難としていつているのではない。

留学生のことではないが、ときどき、「最近の大学生は、若い情熱が薄い。一体何のために大学へ来ているのか」などといわれたりする。そんなとき、私も、「本当ですねえ、嘆かわしいですねえ」などと言葉を合ったりもするが、心の中ではそうは思っていないのである。かつて、大学生であることは、特別の情熱をかけるべきことであった。周囲の期待を背負って入学し、卒業後にしかるべき地位や職業に就いてその期待に応えるという道が見えていた。しかし今は、大学生であることなどは、全くありふれた、普通のこととなっている。

「日本の優れた経営のノウハウを学びたい」などともいわず、「日本との架け橋になりたい」などともいわず、「日本独特の伝統文化を学びたい」などともいわない。「じゃ一体何のために日本へ来たの?」と問うと、「別に・・・」といったりするかもしれない。「教育」とか「支援」とか固く考えると、全く関わり甲斐がないように見える。だが、もしかすると、留学に格別の思い入れもなく、でも何となくこの国が気に入って、ふらりと立ち寄っただけという、そんな学生との普通の付き合いが、むしろ、これからの留学生との関わりになってゆくかもしれない、と思ったりしている。



日本人のおもてなしの心

劉 洋（中国）

日本と言えば何を連想するだろうか。咲き乱れる桜、それともおいしい日本料理だろうか。発達したアニメ産業や尖閣諸島の問題を思い浮かべる人もいるだろう。日本と言えば…。交換留学生としての私は、おもてなしの心に違いありません。

日本に来る前に、家族や友達から遠く離れた場所へ一人で行くことができるのだろうかと思悩むこともありましたが、しかし、最終的に日本に行きたいという意欲が不安に勝ち、私は全ての困難に立ち向かう決意を固めました。日本に着いた後、和歌山大学の国際交流センターのメンバーやWIN コンコードの皆さま、さらに日本語指導のボランティア先生たちから多くサポートをいただいたおかげで、私は既に日本の生活に溶け込んでいます。これまでの日本での思い出で胸がいっぱいになっていますが、その中で私が一番感心したのは日本人のおもてなしの心です。

日本人の「おもてなしの心」とは、相手や物を思いやり、慈しむ心です。この日本の文化とも言える「おもてなしの心」は茶道から由来しています。私は日本人の友達に誘われ、一度日本の茶道を体験したことがあります。それは日本に来たばかりの頃、友達から誘われて、一緒に和歌山大学の茶道部へ行きました。茶道部の部長が私にやさしく茶道の礼儀を教えてくださいました。甘かったお餅とちょっと苦かった抹茶をいただきながら、私は茶道部の皆さんの一期一会の気持ちと本心からの笑顔に感動させられました。こういう客に対する優しさはまさに日本人のおもてなしの心ではないかと私は感じ始めました。

おもてなしには目に見える部分と目に見えない部分があります。例えば茶道の世界でいうと、お客様をお迎えするときは打ち水をして清め、お花を生ける、というようなことが目に見える部分、それに対して、「どうしたらお客様に喜んでいただけるだろうか」と考えて、相手に対し心を尽くす気持ちが、目に見えないおもてなしだろうと思います。その目に見えない部分があって初めて、目に見える形へと反映するのです。私は、先日、WIN コンコードのお母さんの家に招待されました。食事の前に皆一緒に近くの温泉へ行く予定でしたが、出発する前にお母さんの家の玄関に幾つかのかわいい袋が置いてありました。「これは何ですか？」

と聞くと、人数分のタオルを準備してくれたことがわかりました。お母さんの見えない思いやりはこの目に見えるタオルの袋に反映されたのではないかと私は思いました。今はそのピンクのタオルの袋を思い出しても心が温かくなります。

おもてなしの心は人間関係や社交の場だけではなく、企業にとってもますます重要になって、企業の付加価値の一部を形成するようになってと思います。特に接客業では、最高のサービスといえは食事や待遇そのものよりも心を相手に示すこと、つまり心のコミュニケーションが大事です。私がアルバイトしている料理店では、固い接客マナーよりもお客様との心の交流を重視しています。お客様が来るときに、いつもお客様が好きなテーブルを用意し、お客様が好む料理を先に勧めます。いつも自らお客様に声をかけ、誠心誠意を持って、お客様を家族のように接します。要するに、いかなるときでもお客様の立場や、お客様中心の発想に立ってサービスするなら、おのずと感動を呼ぶおもてなしになるということなのです。こういう「大切な人と過ごす、大切なこのひと時を、精一杯大切に作る心」がお客様の満足感と幸福感に繋がるものです。

私は去年の12月にディズニーランドへいきました。ディズニーに一度でも行ったことがある人は、必ずその楽しさ、ワクワク感、笑顔と気持ちのいいサービスに感動すると思います。もちろん私もそうです。ディズニーには「行動基準」はあっても、接客マニュアル的なものは殆どないそうです。ではどうして個々のキャストがさまざまな場面で感動を生む接客ができるのか。それはディズニーが人のHappinessを作るという理念を徹底しているからです。そこで働くキャストたちのモチベーションを最大限に上げられるような仕掛けや仕組みもたくさん作っています。「どんな方も笑顔にさせようとするのがディズニーのおもてなし」なのです。こういうおもてなしの心こそが、今、グローバル化の波に晒され大きな時代の変革期を迎える日本にとって、世界に誇れる「強み」となります。

小さい茶室から大きなディズニーまで、日本人のおもてなしの心が目に見えるところでも目に見えないところでも私を感動させています。この文章をご覧になったあなたも日本人のおもてなしの心を見つけて、自分のおもてなしの心を育てていただければ幸いです。私はこれからも日本のおもてなしの文化を中国に伝えられるよう努力していきたいと思っています。

ベトナムと日本の違い

マイ キム ヒエン (ベトナム)

世界地図を広げて、アジアにある中国の南の細長くてS字形の国がベトナムです。北は中国、北西はラオス、南西はカンボジアに隣接しています。また、東は北から南にかけて、海に面しています。海岸線の長さは約 3260kmです。海は幸が豊富です。一方毎年台風も来てすごく大変です。

ベトナムと日本の違いがいくつかあります。まず、ベトナムのお正月の違いです。ベトナムは旧暦のお正月（2月頃）に祝い、TẾT（テト）と言われています。お正月に食べる物は地方によって、形や作り方に違いがあります。例えば、代表的な料理にもち米と豚肉から作られる物があります。北部は肉をもち米で挟み、葉で四角い形に包んでBánh Chung（バンチュン）と言われている。南部はバナナの葉にココナッツミルクを混ぜたもち米をのせて、さらに肉またはバナナを上のにのせて巻きます。Bánh Tét（バンテツ）と言われている。



次に、日本とベトナムの挨拶の違いです。日本では基本的に朝・昼・晩の時間に合わせて、「おはようございます」「こんにちは」「こんばんは」と挨拶します。実際は「こんにちは」が特に多く使われています。また、バイト先では、もう夕方5時なのに「おはようございます」と挨拶しなければなりません。これはどういうことでしょうか。

ベトナムでは朝・昼・夜全ての挨拶語は「xin chào」（シンチャオ）です。外国人が私たちに「シンチャオ」と挨拶すれば、誰でも喜ぶと思います。しかし、ベトナム人同士で「xin chào」と挨拶することはほとんどありません。この言葉は、とても堅苦しい印象を与えてしまうからです。少し親しくなれば老若男女関係なく「どこに行くの?」「ご

飯食べたの?」というような言い方で挨拶します。時間にも関係なく使われます。

続いて、ベトナムと日本の共通の乗り物です。日本ではバス、電車また自転車がよく利用されています。特に電車はどこでも行けるし、時間も正確なので、便利で使われています。ベトナムでよく乗っている物はバイクまたは、バスとかタクシーです。ベトナムには地下鉄はもちろん電車もありません。ベトナムの列車はディーゼル機関車です。そして、北部のハノイと南部のホーチミン市を結ぶ鉄道は約36時間かかります。便もとても少ないですから、見たことがない人、もちろん、乗ったことがない人もいます。

この間バスで市役所前から大学まで行く時、恥かしい話ですが、次のような事がありました。あまりバスに乗らない私は無事に大学までに着いたのですが、小銭の用意を忘れていました。千円札を両替機に入れると、小銭が出てきて、それを全部持ってバスを降りてしまいました。運転手さんに呼ばれて、お金をちゃんと払いました。それで、ベトナムのバスと比べてみると、支払いの方法に違いがあります。ベトナムのバスは車掌バスとワンマンカーの2種類あります。車掌バスなら、別に問題がないですが、ベトナムのワンマンカーは両替機がありません。小銭がない場合は札を直接入れると、小銭が出てきますが、それはおつりです。だから、私はおつりだと思ったので、持って降りてしまいました。これから私ももちろん間違いません。後輩のベトナム人留学生にはこのような間違いをしないように教えてあげようと思います。

これらは私が見た日本とベトナムの違いです。私の知識はまだ不十分で、これ以外にもまだ、たくさんあると思います。日本語を学んでいる外国人の私たちは日本の事を学びながら、自国の事も伝えていきたいと思っています。そうすれば、世界の各国はお互いの様々な事の理解を深めていけると思います。

もし、ベトナムに興味を持ったら、ぜひベトナムに実際に行ってみてください。全てが良い事ばかりとは言えませんが、新しい発見があると思います。ベトナムの一番いい季節は2月です。2月は晴れる日が多くてベトナムのお正月の期間ですから色々なイベントを行っています。ベトナムのお勧めは伝統的な文化（古い道やお寺）に興味を持っている方に北部のハノイや中部のフエなどが一番いいと思います。そして、にぎやかなホーチミン市や緑が多いメコンデルタも皆さんを待っています。

ラオスのお正月

ネンホンマラー ティッパ・ワン(ラオス)

日本人はラオスやラオスのお正月についてあまり知らない人はたくさんいると思います。ですから、お正月にラオス人は何をするかについて紹介したいと思います。

アメリカや日本のように国際的な新年とお正月と同じ日で1月1日ですが、ラオスの本当の新年は毎年異なります。毎年4月の中旬に3日間連続で行われます。仏教のカレンダーに従って4月の13日から15日まで行つか、あるいは14日から16日まで行うことになります。ラオスの人々にとってラオスの正月は1年中で、一番楽しい時期です。ラオスのどこの地域でも盛大に新年の祝賀行事が行われます。

お正月は3日間もあり、ラオス人は何をするかと言うと、人によって異なります。お正月は、「水掛け祭り」とも言えます。この時期になると、街を歩けば、水を遊んでいる人たちに水掛けられます。この祭りについて良く知らない外国人は知らない人に水を掛けられるとびっくりして怒るかもしれませんが、「新年を迎えるにあたり、旧年中の悪いものや病気を洗い流し、新たにきれいな体や健康を手に入れるために身を清める」という理由で、ラオスの人々は互いに水を掛け合っています。(写真1)



若い子が互いに水をかけ合って楽しむお祭りのようにも見えますが、年長者や両親、上司、尊敬すべき全ての人に対しても容赦なく水をかけます。これは旧年中の無礼を詫び、気持ちを新たに教えるためだとされています。互いに水を掛け合うことだけではなく、一番大事なことは、お寺へ行き、各寺院に収められた仏像を洗い清めます。(写真2)

ラオス人は、正月初日にはお寺巡りをしながら



寺の敷地内にある仏像などに聖水をかけて回ります。基本的に7つの寺を訪れるのが良いとされ、各人自分で選んだ寺を巡っていきます。

二日目は、お祖父さん・お祖母さん、両親に水を掛けます。子供として、旧年中の悪いことなど



を両親に謝ります。そして、親たちの幸福や健康に祈ります。最後の日、友達などの所へ訪問したり、自分

の家でパーティをしたりします。旅行する人もいます。(写真3: タクバーツ 托鉢を示す)

もう一つ重要な儀式があります。ラオス正月の祝賀会「タクバーツ (托鉢)」の儀式から始まり、その後、「バーシー」の儀式が行われます。「バーシー」とは、親族、友人、近所の人々などが集まり、幸福と繁栄を祈願する儀式です。(写真4)

円錐形の本体に花や竹に結び付けられた木綿の糸などが飾られ、その周りには、お供え物のゆで卵、りんご、もち米、ラオ



ス酒などが並びます。「パー・クアン」の「クアン」は「魂」という意味です。ラオス人は、クアンが体内にある時には、人々は幸せに暮らすことができるが、クアンが体内から出てしまうと、不幸が起きると信じています。そのため、クアンを体内に入れるためにバーシーの儀式を行います。この儀式は1日目で行います。お正月になると皆が「バーシー」を行うわけではないです。

中国の伝統的な民居

代 向斐（中国）

中国の伝統的な建築は、官式建築と民間建築の大きく二つに分けることができる。官式建築とは、主に宮殿や陵墓、祭祀などに使用される壇廟、上流階級の邸宅を指し、宗教建築は壇廟の中に含まれる。一方、民間建築とは、主に庶民の住居で、民居と呼ばれ、そのほかには先祖を祭る祠堂や集落の入り口にある寨門、橋なども含む。封建社会における階級制度の影響を受け、官式建築に用いられる琉璃瓦や斗栱、赤い塗料、仏像を安置する須弥座などは、いずれも民間建築に使うことが禁じられている。

中国の伝統的な建築の特徴をまとめると、次のようになる

第一の特徴は、建築材料に土と木を主に用いることである。

第二は、伝統的な建築に用いられる色彩も特徴的である。屋根には黄色い、緑、青い、褐色、黒の琉璃瓦が使われている。異なる色の琉璃瓦を組み合わせて用いられることもあるが、多くは一色を基調とし、ほかの色で緑される。とはいえ、琉璃瓦は官式建築だけに使用が許されたもので、大部分の民居では灰色の瓦が用いられた。屋根のほかにも、伝統的な建築における木材は全て塗装されている。木材の部分が鮮やかな色で塗られるため、色は大切な要素となっている。しかし、派手な赤や緑は官式建築にしか用いられない、民居では質素で気品のある色が使用された。

伝統的な建築は個々の建物の表現よりも全体としてのまとまりを重視している。一つの敷地に、中庭を挟みながら複数の建物で構成されるのは、それを象徴しており、使い方を問わず、さまざまな建築で見られる。



伝統的な建築の美は中国の伝統的な絵画に見られるような優美な線によるところが大きい。伝統的な建築は柔和な曲線や折れ曲がりで構成されて

おり、直線はほとんどない。

民居の多様な形態

中国は多民族国家である。現在漢民族をはじめチベット族、満州族など56の民族からなる。各民族が長い歴史中で培ってきたそれぞれの民族特徴は、物質文化や精神文化として各民族の社会生活の中に反映されている。とりわけ、民居は各民族の物質文化の象徴である。建築文化の相違は地域や社会風俗、宗教といった様々な要因によるが、中でも地域がもたらす影響は大きい。

中国北方の民居

中国北方の民居と言えば、北京の四合院が代表格である。伝統的な民居として、元の時代（1271～1368年）に建てられ始めた。ただ、今現存する四合院の大多数は清の時代（1644～1911年）から1930年代にかけて造られたものである。



四合院の「四」の字は、東、西、南、北の四面を表している。「合」は取り囲むという意味で、四合院は四つの面に建物があり、あるいは四つの面が壁に囲まれた家屋のことである。四合院の配置は、十分に伝統的な中国社会の宗族制度と礼法にかなっており、一家を構成する人々は長幼、男女、尊卑により、明確に使用する部屋が割り振られる。外に通じているのは門だけで、一般に窓はない。あっても、南向きの部屋から採光し、壁の高いところに小さな窓があるだけなので、門を閉めてしまえば、四合院は外の世界と遮断される。四合院に住む人は余り隣人とは行き来せず、一家は小さな庭で暮らし、世間とのめごともない。四合院は歴史の中で、揺れ動く社会の中で、北京の人が求めてきた心落ちつく閑静で安楽な住み家なのである。

北京の四合院の大門をくぐると、正面にあるのが「影壁」である。金持ちの家庭に限らず、一般的な家庭にも影壁がしつらえられることが少なくない。南のほうでは、これを「照壁」という。また、古代には「蕭牆」と呼び、家人にトラブルが起ることを「禍起蕭牆（災いは壁の内側から起る）」といった。では、なぜ影壁をつくる必要が

あるのだろうか。興味深い、次のような言い伝えがある。かつて、悪霊は門の隙間から入り込み、家に災いをもたらすと考えられていた。そこで、人々は大門の内側に影壁を立てたら、入り込んだ



悪霊が、影壁に映る自分の影を見て、驚いて逃げ出したというのである。「悪霊よけ」のほかに、影壁は外から中が見えないようにするという実用的な効果もある。

福建土楼

福建土楼は一族が集まって住む巨大な民居で、土楼と呼ばれるのは、この巨大な建物の壁の大部分は土でつくられているからである。

古代の中原において戦争が絶えず、住みやすい環境がなかったころ、一部の漢族は南へ移し、客家人を形成した。その後、福建省西南部の山間地域に辿りついた一部の客家は、元の住民と土地をめぐって衝突し、さまざまな攻撃から守る必要が生じた。そして、生きるために目立たない山間を選ぶとともに、安全を確保できる民居を築いた。福建省の客家の人たちの土楼の中で、多くは八卦の図に照らして設計されたものであり、中華民族の伝統的な文化の烙印が深くその中に刻まれている。その最も典型的なものは振成楼である。



振成楼は 1912 年に建てられ、敷地面積は 5000 平方メートル、内外の回りに分かれ、楼の中に楼があり、楼の外に楼がある枠組みとなっている。前の入口は「巽卦」で、裏の入口は「乾卦」である。外の回りは 4 層からなり、1 階に部屋 48 間があり、1 卦に 6 間がある。卦と卦の間にアーチ門で通じ合っている。卦と卦の間は防火壁で、1 卦に火事が起こっても全体に及ぶことはありえない。卦と卦の間に、さらに卦門が設けられ、それを閉めると、それ自身で 1 単位となり、開けると、各単位はすべて通じ合うことができる。一旦盗賊が

室内に入ったら、卦のドアを閉めて、甕の中のスッポンを捕らえるように、盗賊を捕らえることができる。

その歴史の根源をさぐって見ると、まず客家の人たちは中国の中央部から移して来たものであり、中華民族の伝統的文化・思想の影響を極めて深く受け、八卦は中国の伝統文化の中の經典の 1 つである。その次に、生存を求めるため、彼らは自然と社会の様々な困難に直面し、八卦は昔から人々に利用されて軍隊を配置し、陣を敷き、敵に抵抗した。安全の視点から出発して、土楼を設計、建造する時に八卦を活用することは、英知に富んだ客家の人たちにとって、別に不思議なことではなくなった。

環極楼は清 (1693 年) に建てられたものである。この建物は土木構造で、規模が大きく、壮観な円形の村落の形をなしている。建物全体は 4 層からなり、高さは約 20 メートル、直径は 43.20 メートルである。

「環極楼」という名称については、北極星が子の位置にあって午の方向に向かっており、長期にこの位置にあってその移動が見られず、天体のすべての星の主であり、ある人は詩の中で、「川があれば必ず東へ流れ、北極星を取り囲まない星はない」と言い、その意味はすべての星が北極星を取り囲んで回転するものである。

この楼は北の壬子の位置にあって丙午の位置に向かっているため、「環極楼」と名付けられたという。今もう一つの説は、回りは円であり、「円 (環)」は吉祥の意味がある言葉であり、「環極 (北極星を取り囲むこと)」は、団らん、円満を極めることを願うというものである。

環極楼の最大の長所は耐震性が強いことである。300 年以來、地震を何度も経験し、県誌によると、1918 年 2 月 13 日に永定にはマクニチュード 7 度の大地震が発生した。しかし、地震の後で、この円形の建物は割れ目が意外にもだんだんとせばまり、わずか 1 本の細長いひびしか残らず、建物の主体は無事で、依然として高くそびえ立っている。環極楼の今もう一つの特異な点は建物の中心部の回りに祠堂 (先祖を祭る祠) が設置されておらず、広い中庭となっている。これは土楼の中で又と無いものであり、礼儀を重視し、儒教の倫理規範を守る封建社会では更に不思議なことであった。このため、環極楼はまた「親不孝の楼」とも称されている。

参考資料：

王 其鈞『民居—イラストで見る中国の伝統住居』

新留学生紹介

グエン マイ フーン (ベトナム)

日本に来てから自分が成長していくと感じています。子供のころから今まで私はいつも家族と暮らしました。一人暮らしは初めてです。なんでも自分でして、小さいことから大きなことまで自分で決めます。最初は本当に困りました。どこから始めるのが正しいか迷いました。しかし、ゼロから始めなければならないので、一生懸命考えて行動しました。失敗なくうまくいける場合もあって、何度も間違っただけで最初からやり直す場合もありました。そのおかげで大変勉強になりました。思わず決めるようになりました。一人旅も挑戦しました。いつも怖くないか寂しくないかと聞かれました。何も感じないわけではありませんが、その怖さや寂しさより自分はどこまで頑張れるか知りたかったです。問題を乗り越えて歩き続けるか単なるトラブルで自信を失うか試しました。今の自分を越えて、成長していきます。それだけでなく、日本のことと思いやりのある日本人のことも肌で感じました。相手の立場から判断して、相手の気持ちを大事にする日本人の心を学びたいと思います。一人前になれるように頑張ります。やはり日本に来てよかったと思っています。

ゼイナロウア アイリン (アゼルバイジャン共和国)
はじめまして。私はゼイナロウア・アイリンと申します。アゼルバイジャン共和国という国から参りました。よろしくお願いいたします。

皆様の頭に浮かんでいる一番目の質問は“アゼルバイジャンはどこですか？”だと思います。それで母国の短い紹介を始めます。アゼルバイジャンには古代から続く長い歴史と 6000 以上の歴史建築遺物がある国です。旧ソ連の国ですから言語は二言語喋ります (母語のアゼルバイジャン語とロシア語)。アゼルバイジャンは南東ヨーロッパのカフカス地方にあるテュルク系の国です。1991 年のソビエト連邦崩壊の後、独立しました。国境は西はトルコ、南はイラン、北はロシアおよびカスピ海に面しています。アゼルバイジャンの首都はバクーという町です。バクーの多くの遺跡も観光客を魅了しています。バクーの”イチェリ シェヘリ” (inter city) と“乙女の塔”は ユネスコ世界遺産のリストに記載されています。イチェリ シェヘリには中世の建築物が 44 あり、その外観は世界でも独特のものです。

次に自分について、ちょっと紹介したいと思います。先に書きましたが、私の名はアイリンです。平成 2 年 12 月 20 日の生まれ、22 歳です。バクー国立大学の東洋学日本語学科を卒業しました。実は二年前、国際交流基金の関西国際センターに



おいて行われた“日本語学習者訪日研修”に参加した経験があります。今回大学院を目指して参りました。日本人に支えられて精一杯の感謝を込めて、一生懸命頑張ります。

プロガノ ニコラス（アルゼンチン）

はじめまして、私はプロガノ・ニコラスで、先週アルゼンチンから来ました。ブエノス・アイレス市の日本庭園にお父さんと一緒に訪ねた児童の時から、東アジアに興味があるので、高校を卒業すると、デル・サルバドル大学に入って、東洋学を学習し始めました。アジア歴史、宗教、文学、現代アジアの経済と政治、いろいろな分野を学習できますが、特に日本が好きです。それから卒業した後で、文部省の奨学金を受けることができ、和歌山大学院観光学部で国立公園の方策に関する研究をしています。

ブエノス・アイレス市から日本までの26時間の旅行では、映画をたくさん見ましたがあまり寝ることができませんでしたから、関西国際空港に到着したら、とても疲れてしまって大変でした。バスで和歌山県へ行きながら、窓から山々の森林を楽しんで私の都市と本当に違うと思いました。ブエノス・アイレス市は、アルゼンチンの首都で、南アメリカのもっとも巨大な都市のひとつですから、いつも賑やかです。今は和歌山の静かな生活を楽しんで、日本に住むことにだんだん慣れてきました。実は、最初の一週間に新しい物がたくさんあって、スーパーマーケットで買い物するのは冒険のように感じました。その上、一人暮らしは初めてなので、新しい経験がたくさんあります。

今から、もちろん日本語を勉強し続けたい、大学の時に読んだ所も訪ねたいし、日本文化も詳しく知りたいし、様々なことをしたくて、これでの一生にとっての大切な経験を積むことができると思います。よろしくお願いします！

劉 穎(台湾)

はじめまして、台湾の新竹からきました。高校を卒業して、去年の九月に日本にきました。

半年間は東京新宿の日本語学校で勉強しました。

東京でいろいろなことも体験しました、足立の花火大会、スカイツリー、東京タワー、上野動物園、ディズニーランド、横浜中華街も行きました。楽しい思い出がいっぱいありました。

和歌山ははじめてですが、静かで、風景はきれいで、空気もいい、東京と比べると和歌山は住みやすいな町だと思います。このような環境で四年の



生活を過ごすことを本当に楽しみにしています。

十九歳の私は家族と離れて、一人で生活することが始まりました。楽しいことはもちろん、辛いこともありました。でも、留学は私にとってずっと前からの夢ですが、どんなに大変なことがあっても、絶対にあきらめません。これからは私らしく、一生懸命生きて、勉強して、遊んで、夢に向かって、頑張っていきたいと思っています。

エト メニエ ルク デマイヨー（ガボン）

はじめまして、デマイヨーです。ガボンから来ました。今年32歳です。小学校の先生です。9年間教えてきました。フランス語と歴史と地理と数学を教えました。今、教員研修生です。和歌山大学で、教育行政について研究するつもりです。私は、一年間だけここに住みます。でも、和歌山に来る前は、大阪大学で日本語を少し勉強しました。私の趣味は、本を読むことと書くことです。そして、旅行するも大好きです。

さらに、日本は、安全な国です。日本人は、とても親切なので決して忘れない。和歌山に来てから、WIN コンコードの人は、私にたくさん手伝ってくれました。これから、会館の生活は楽しくて便利になります。

最後に、ガボンという国についてです。アフリカのまん中にありますが、小さい国です。静かなところだと思います。よかったらガボンに行きませんか？

アミラ（マレーシア）

皆さん、はじめまして。私の名前はヌルル アミラディアナ ビンティ ゴルキップリです。長いのでからアミラと呼んでもいいです。今年から和歌山大学の環境システム工学部で勉強します。

私はケダ州から来ました。ケダ州はマレーシア

の北の方にあります。北の方ですが、北海道と違ってケダ州は暑く、マレーシア全国は一年中暑いです。でも日本の夏ほど暑くありません。マレーシアは自然が多いのでぜひ来てください。

私の趣味はアニメを見ること、音楽を聴くことそして漫画を読むことです。今読んでいる漫画は黒子のバスケです。でも最近はちょっと忙しくて何も見ませんでした。私は日本のドラマも好きです。一番好きなのは花盛りのキミたちへです。小栗旬がハンサムですから。

私が高校生の頃はテコンドをやっていました。アーチェリも少しやっていましたがあまり上手ではありません。でもこの二つのスポーツはとても楽しかったです。日本にいた間にも私がぜひ日本のスポーツをやりたいです。興味のあるスポーツは合気道と弓道です。

日本で留学する間、私は日本人と他の国の人とたくさん交流したいです。いろいろな文化をシェアして、他の国の文化と言語を学びたいです。皆と語り合いながら愛が広がるだろうと思います。

マレーシアでは一番高い山はキナバル山です。東南アジアでもっとも高い山です。私はキナバル山に登ったことがないんですが、いつか友達と登りたいです。日本のきれいな富士山も友達と一緒にのぼりたいです。高いところからきれいな風景を見ることがいいねと思います。

日本にいた間に私は日本全国に旅行したいです。せっかくのチャンスですから色々な有名なところを見てみたいです。日本の料理もたくさん食べたいです。私も韓国とヨーロッパに旅行したいです。もちろん長い休みの間に旅行します。

これから色々お世話になります。どうぞよろしくお願いします。

馬 蓉 (中国)

首都師範大学からきた馬蓉と申します。出身地は湖北省で、湖北省だと聞くと、よく辛いもの好きだと言われます。湖北省出身だけど、辛いものはそれほど好きではありません。

中国と日本は歴史の問題でいろいろと誤解されています。日本に来てからもう一週間になりました。短い間でしたが、日本人の親切さをしみじみ感じました。バス停で大学との連絡を取るのに困っている時、見知りのない私たちに携帯を貸してくれた日本人も、わざわざ出迎えに来てくれた先生方も、生活でいろいろとサポートしてくれたWIN コンコードの皆様も、親切にしてくれて、心



から感謝しています。

御存じのように、今北京は環境の問題で、空気が汚されてしまった。特に春になると風が強くて、砂が多くて、毎日青空が見られないし、外に出かける時マスクをかけなければなりません。日本に着いたとき、おいしい空気や綺麗な街に心を引かれました。

今まで、一番印象深いことは、今日午後友達が買い物に行った時、財布を落としてしまって、幸いなことに財布を拾った人は交番に出してくれたことです。中国ではそれは滅多にないことかもしれない。本当に感動しました。

日本での一年間を通して、日本を自分の目で見たり自分の肌で感じたりしようと思っています。そして、一人前の日本語教師になるために、頑張ります。

廖 昱涵 (台湾)

皆さんこんにちは、廖昱涵と申します。19歳で観光学部です。台湾の南にある高雄から参りました。趣味は歌を歌うこと、バレーボールで、ハーモニカが得意です。日本語を学びたいと思ったのは日本語に惹かれて、私も日本人みたいになりたいと思ったのがきっかけです。その後、母のような立派なガイドになりたくて観光を選びました。

私の出身高雄は海港都市で、ある部分は、和歌山の地理と気候はとても似てます。年平均温度は25度で、一年中、人が海で遊べるくらいで、人々の個性も気温のように情熱的でとても親切です。

高雄の銘菓は「旗鼓餅」と「木棉酥」です。「旗鼓餅」の「旗鼓」は高雄の発展がスタートした記念の地、旗津と鼓山から命名されました。一方、「木棉酥」は高雄の市花、綿の木の花の形によって出てきたクッキー生地のお菓子です。

知らない和歌山に来たばかりの時は、先生たちと先輩たちが私が困っている時に力になってくれ、

何事にも適応する事ができました。日本語や基礎科目はまだですが、一生懸命に頑張ります。

フエン カン ゴック(ベトナム)

日本語について研究するという目的で、2012年10月に日本へ来ました。言語の研究というのは言語についての理論的な知識を勉強することは当たり前ですが、実際に使っている言語もわからなければならないでしょう。

そういうわけで、日本に在留するうちに、専攻の勉強は言うまでもないが、生の日本語を体験するため、さまざまな日本人と話すようにしています。ベトナムで習っていた日本語は外国人向けの日本語で、実際に使っている日本語と全然違っていていると思います。また、社会の状況により、日本語もだんだん変わってくるでしょう。日本人と話さないと、そういうことが分からないでしょう。

色々な日本人と出会えばするほど、日本人と日本の社会のイメージがだんだん浮かべるようになります。来る前に、本や他の人の話で日本についてよく聞いていましたが、人の目によりさまざまな考えがあると思います。私も、いつか自分の目でどんな日本が見えるのかと楽しみにしていました。今度、日本にいる3年間の予定の間、ぜひ日本について自分の話を造りたいと思います。

賈 馳(中国)

私は幼い頃和歌山で小学校生活を送っていた日々がありました。和歌山には私の思い出が沢山詰まっており、そして今の私にとって和歌山は大切な第二の故郷でもあります。

物心がつき始める頃から住みはじめた和歌山、馴染みがあり、とても懐かしい所でもあります。今回は留学生という身分でこちらに戻り、子供の頃とは一味違った和歌山での生活を力一杯送っております。



入学が始まるまでのこの一年半の間、和歌山で沢山の留学生の方に出会いました、それぞれ違った故郷を持ち、違った習慣を持ち、それぞれ日本での生活に困難を抱えながらも一生懸命それ乗り越えて生きる意志は、何よりも大切な事だと実感しました。

これから先、様々な困難が行く手を阻んでいる事があるかもしれません。ですが大きな困難程人を成長させるものはないと思います。

又もし努力を重ねたのち結局成功は無くても本気で努力した分の成長は約束されとも思います。何より、今回和歌山大学に入学出来たという機会を大切に、これからはみなさんと共に成長して行ければと考えています。

2012 年度 活動経過

-
- | | |
|---------|--|
| 4月 8日 | 新入生歓迎お花見 |
| 4月 30日 | 文楽鑑賞 |
| 5月 10日 | WIN コンコードニュースレター22号発行 |
| 5月 13日 | 第4回 NPO 法人 WIN コンコード
総会・交流会 |
| 6月 26日 | 和歌山県立自然博物館見学 |
| 7月 19日 | 榑島精機製作所見学 |
| 8月 4日 | 紀州ぶんだら踊り・パーティー |
| 8月 25日 | サマーデイキャンプ(有田川町) |
| 10月 7日 | 第21回留学生の故郷を語る集い
「中国の伝統的な民居」代 向斐
万葉薪能鑑賞 |
| 11月 11日 | 第4回 WIN コンコードバザー開催 |
| 11月 25日 | 大学祭 模擬店協力 |
| 12月 23日 | 八朔狩り・鍋パーティー |
| 1月1~3日 | お正月 |
| 3月 10日 | 卒業生を送る会 |
- 年 間

- ・生活関連の情報提供や支援
- ・生活用品の貸与
- ・就職活動に向けた勉強会
- ・留生活活動(卒業アルバム作成、大学祭の模擬店)の協力

和歌山県下の高等教育機関に在籍する留学生は、和歌山大学 177 名、和歌山県立医大 13 名、近畿大学 2 名、高野山大学 1 名、和歌山工業高等専門学校 8 名、計 201 名、出身国は中国、マレーシアなど 13 ヶ国となっています。(2012 年 10 月 1 日)

平成 25 年度は和歌山大学においては、12 ヶ国、193 名で、中国人留学生は約 8 割 156 名です。

会社見学

康 菁（中国）

2012年7月19日に、私は以前からずっと憧れていた和歌山の代表的企業の一つである株式会社島精機製作所を見学することができました。この会社は、和歌山のエジソンとも言われる創業者の島社長の数々の発明が会社発展の原動力と聞いています。

いつもお世話になっているWINコンコードの先生からのお誘いでした。WINコンコードでは毎年留学生たちを対象に、和歌山県内外の優良企業の見学を行い、日本の先端企業を見聞する機会を提供してくれています。先生の車が島精機製作所に着くと、すぐに目の前の立派な建物に案内していただきました。ホールに入ると、まるでファッション展示会に行ったような錯覚を起こしました。参加した留学生の皆さんはモデルの写真を撮るのに夢中になっていました。実は、ホールで展示されている服装は、無縫製型コンピュータ横網機で縫製されたもので、服の縫い目がないと言われていました。

デザインを始め、デザイン画作成、ニットプログラミング、糸の企画、3Dシミュレーション、プリント図案作成など「All in one」というシステムを使い、実物とそっくりのサンプルを完成することができます。これによって、大幅にコストダウンすることが可能になり、企業の利益に繋がります。また、創業当初の主力製品だった手袋を一枚作るための時間が、2分もかからないことに感心しました。

工場見学の後、海外事業部の担当者の方から中国とベトナムとマレーシアでの横網機の販売状況について教えていただきました。また、今後の国際戦略の取り組み状況などについてのお話もいただきました。いま日本の企業は東南アジア諸国への取り組みが盛んであり、取り分けベトナムやミャンマーへの関心が強いと言われていますが、島精機製作所は社会主義国のラオスに魅力を感じていることや、その理由についてお聞きしました。机上の空論では無い非常に現実的で、説得力のある企業戦略の一端を垣間見るような感じで、刺激的で心が躍る気持ちになりました。建物や工場の外観だけでなく、矢張り和歌山の代表的な超一流企業だなと実感しました。

憧れの和歌山

張 雪（中国）

日本に来た時、ちょうど放射能漏れの事故が終わったばかりの時期だった。日本に来る前、家族に反対された。やはり、日本が好きだから留学することにした。必ず日本に行くという決心をしていたので家族も私を止めるのを諦めた。心配してくれる気持ちは十分わかっていた。

2011年9月27日、やっと和歌山に着いた。その時の気持ち、今でも覚えている。周りの全てが変わった。誰もが中国語ではなく、日本語を話していた。人も、街の建物も、瞬間に変わってしまった。ドキドキしていた私は、どうしたら良いのかさっぱりわからなかった。ただ、もう中国から離れたので、一人で頑張らないといけないということは分っていた。寂しいかもしれないが、自分で頑張ろう！

しかし、知らないうちに、そういう気持ちが消えてしまった。同じ会館に住んでいる先輩たちが歓迎会を行なってくれたりして、家族のように優しくしてくれて本当に感動した。

それから、WINという団体の名前が耳に入った。いつも先輩たちから聞いていて、私はずっと楽しみにしていた。とうとう、歓迎会の日が訪れた。お母さんとお父さんとの初対面の日だった。非常に緊張していた。しかし、お母さんの優しい声を聞いた途端、そういう心配がなくなった。実は、涙も出てきた。

皆さんに笑われるかもしれないので、すぐ手で拭いた。自分の子供と会うような嬉しさが私達の心に届いた。嬉しくて感動しての涙だった。日本に来てからずっとお世話になった。いつも私達の面倒を見てくださった。お母さんの手作りの料理も最高だった。中国に帰っても、またお母さんの料理を食べたくて日本に戻ってくるかもしれない。お母さんとお父さんのこと一生忘れない。

そして、学校の先生も、いつも学生を叱るのではなく、非常に優しい先生だった。勉強のこと、生活のことなど全ての面倒を見てくれた。ありがとうを言わないといけない！

日本での思い出は、人生の宝物になったから忘れられない。また、皆さんに会いたい！また多くの思い出を作りたい！

憧れの和歌山に、最高の賛美を送ります。

留学生に対する就職活動支援

理事 出口 勝美

2009 年から始めている留学生への就職活動支援勉強会も早 4 年が経過しました。この活動を通じて感じたことについて述べたいと思います。

先ず、留学生が日本の企業に就職する難しさを実感しています。彼等も漠然と大変なのだろうと認識しているようですが、実際に就職活動に入ると、考えていた以上にはるかに厳しい現実と直面します。長期にわたる日本のデフレ経済、景気の低迷により、企業の社員募集状況が好転しないという背景もありますが、留学生にとっての最大の課題はやはり彼らの日本語力に尽きます。

就職活動の第一歩は志望企業へのエントリーシートを書くことから始まります。このエントリーシートが思うようには書けません。日本語力の不足によるものです。勉強会に参加した何名かの留学生はこれを書くのが難しくて脱落してしまいました。十分に書けないのは日本語力だけでなく、日本の社会、経済、文化等についての、所謂「日本理解」が不足していることもあります。言葉は文化の結晶です。日本の歴史や文化そして社会、経済や政治に関心を持って、日本を知ろうとする努力も必要です。

留学生は日本人学生と比べてこの 2 点については、当たり前のことですが身劣ります。日本の企業は一般的に、留学生に対して日本人学生と同じレベルの日本語力を求めているとは思われませんが、勉強会に参加した留学生たちの日本語力では個々の彼らの能力や持ち味を十分に伝えられず、過小評価されてしまうことです。エントリーシートが十分に書けなかった留学生たちの中でも、和太に公募があった企業に応募し就職が叶った事例も少なくありません。この場合、エントリーシートによる選別がなく直ぐ面接を受けることになり、語学力や日本に対する理解の未熟さからくる先入観や偏見に囚われることなく、企業側は等身大の彼らに向き合います。勿論、意思疎通が図れる会話は問われますが、結果的には彼らの実力や特性が適正、妥当に評価されたのではと考えます。

どうすれば彼らの日本語力を向上させられるのでしょうか。必要は発明の母と言われますが、彼らが留学生生活を送る中では日本語力があまり切羽詰まった必要性に迫られているように思えません。意図的にその必要性を作り出す仕掛けが必要

です。彼らを実気にさせることが肝要です。

一つの試みとして、学部 2 年生を対象にした勉強会を昨春から始めてみました。3 年生になり、就職活動に入る時期に日本語力の不足に気付いても遅いと考えます。現在、来日 3 年目の留学生二人に週 1 回、2 時間程度ですが、専ら文章を書くことと、新聞を読むことを続けてもらっています。この勉強会を通じて、日本企業への就職や卒業論文の作成のためには、今の日本語力では不十分であることを気付いてもらい、日本語力を向上させる必要性を自覚してもらうことを考えています。この勉強会に参加している留学生二人は、いずれも学部の 2 年生で、来日 3 年目。日本語は 3 年間の学習経験ですが、実力は相当にあると思います。頭もよく又かなり努力してきたのだろうと考えます。しかし、彼等の今の日本語レベルではエントリーシートを書くのは多分困難でしょうし、卒業論文を書くのも非常に厳しいのではないかと考えられます。より日本語力を向上させる一層の努力が必要でしょう。

語学の勉強は時間をかけて地道な努力を継続していくことが大事で、短期間で集中的に努力することによって習得出来るものではないと思います。ましてや外国の文化を理解することなどは生涯かけての努力が必要で、一朝一夕に叶えられないと思います。このことに本人自身が気付き、自覚を持ってもらうことを考えての取り組みです。

一方、この 4 年間で留学生の就活環境もずいぶん変わってきました。和太を含め大学が留学生の就職支援に積極的になってきました。又、留学生を採用する企業も確実に多くなってきたと思えます。経済のグローバル化に対応して留学生の採用に真剣になっているのではと考えざるを得ません。

他方、留学生自身も変化しているようです。日本への留学が益々大衆化しつつあります。留学目的があいまいで、学習意欲や学力が課題となりつつあるように見受けられます。日本企業への就職も是非したいから出来ればいいのにとというように目的意識が希薄になってきたのかなという印象です。こういった留学生のマス化の中で就職支援を今後どう進めていくのか、支援活動の見直しが迫られていると考えます。

これまで、19 名の留学生が勉強会に参加しています。6 名は来年以降の卒業で、13 名の卒業生を送り出したこととなります。そのうち 11 名が日本企業へ就職が叶いました（1 名は大学院進学）。また、そのうちの 4 名が地元和歌山の企業に就職しています。



